

県中教研 英語部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 高橋ひとみ
題 字 金山 泰仁 先生

生徒が思考・判断・表現する言語活動

指導主事 高島 雅俊

今年度より、新学習指導要領が全面実施となりました。外国語の目標には、「言語活動を通して資質・能力の育成を目指す」と明記されており、授業においては、言語活動に取り組みさせることが必須となります。

研究大会等で参観した授業では、ICTを活用して資料を示しながらスピーチをしたり、表情豊かに受け答えしたりするなど、英語表現を楽しむ姿が多く見られました。例えば、3年生の道案内の授業では、修学旅行先で、観光地への行き方を外国人に尋ねられるという場面設定で活動に取り組んでいました。ある生徒は、端末内の鉄道路線図を示しながら、"Take the ~ Line."や"It'll take about ~ minutes."の表現を用い、「最寄りの駅までどのように行けば最も効率的か」「どの路線に乗って、どの駅で降りるか」など、与えられた状況に応じて表現や内容を考え、懸命に伝えようとしていました。相手役が納得した表情を見せると、体全体で喜びを表現し、自信をもって次の相手との会話に取り組んでいきました。

言語活動とは、知識及び技能を活用し、思考力、判断力、表現力等を育成するために取り組ませるものです。目的・場面・状況に応じ、何を表現するとよいかを生徒自身が考え、学び合いながら考えを再構築し、より適切な内容を英語で表現できるような活動を工夫していくことが大切です。

英語は人と人をつなぐツールです。より多くの生徒に英語を使って表現することの楽しさ、相手に伝わったときの喜びを感じてほしいと思います。生徒が英語で伝えてみたいと思える言語活動を設定し、生徒も教師も楽しみながら活動に取り組む中で、英語を学ぶことが楽しいと思う生徒が増えてくれることを願います。

(西部教育事務所)

学びの円滑な接続を目指して

部長 高橋ひとみ

昨年度より義務教育学校に勤務し、前期課程(小学校)の外国語活動と後期課程(中学校)の英語を担当しています。前期課程の外国語活動では、児童はALTが話す英語を耳からだけでなくジェスチャーや表情等体ごと受け止め、聞いた英語をそのまま口に出しています。また、うまく言えないけれど何とか友達とコミュニケーションを図ろうと積極的に英語でやり取りしています。アルファベットの大文字や小文字に触れる場面では、早く英語を書けるようになりたいという思いがひしひしと伝わってきます。コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育まれているのを感じます。

小学校での学びを踏まえ、中学校では、どのように授業改善を進めるかが重要です。そのヒントとなるのが、学習指導要領にある「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定」する必要性だと考えます。ある研究大会の1学年の授業で「人を紹介する場面」が取り上げられました。これまで、言語材料の定着のために、三単現のsを使用させる目的で言語活動を考えることが多かったでしょう。指導案検討では、生徒が人を紹介する目的は何か、生徒が使ってみたくなる状況か、実際にあり得る場面設定であるかという視点で言語活動について先生方から様々なアイデアが出ました。生徒は、英語を使用する自然な状況の中で「何をどのように伝えるか」を考え、試行錯誤しながら表現することにより、英語を身に付けていくのではないのでしょうか。研究大会当日は、英語を使用する状況を楽しみながら、生き生きとやり取りする生徒の姿が見られました。

学びの連続性を意識しながら、これまでの形にとらわれず、少し発想を転換し、指導改善に取り組ましましょう。きっと生徒が英語を使って「できた」と喜ぶ姿につながるはずです。

(高・国吉義務)

第65回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、滑川市立滑川中学校を会場に、岩城廣和教諭による3学年の研究授業が行われた。

災害時の外国人支援に関する英文を読み、それを基に自分は何ができるかについて考え、意見を英語で表現した。生徒同士の対話や教師と生徒がやり取りする場面が多く取り入れられており、生徒は生き生きと授業に取り組んでいた。本文の読み取りでは、パワーポイントで画像を提示することで、生徒は意欲的に活動に取り組み、視覚的に英文の内容を理解していた。また、論理構造に焦点を当てることで、生徒は英文の概要や要点を捉えることができた。さらに、読んだ内容について、自分の意見を生徒同士及び教師との対話の中で英語で表現することで、災害時の外国人支援について理解を深めた。その後、災害時の具体的な場面を提示し、生徒は外国人を助けるためにどのような声掛けが必要かを考え、その場面を演じ、自分の言葉で外国人を助けようと意欲的に活動に取り組んでいた。

全体として、教師及び生徒の発話はほとんど英語で行われ、生徒が英語を主体的に話そうとするための工夫がなされた授業であった。また、読んだ内容について、自分の意見を話したり、書いたりするという技能横断的な授業であった。

部会協議では、研究授業のよかった点や疑問点等について、付箋を用いて話し合った。青山拓也指導主事（東部教育事務所）より、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現するために、「英語で発話する雰囲気醸成すること」、「生徒同士及び対教師との対話を取り入れること」、「生徒自身に関わる学習課題を設定すること」等、貴重な助言をいただき、今後の指導改善に向けて大変有意義な研修会となった。

田中 研匠（魚・西部中）

■富山地区

富山地区大会では、富山市立東部中学校を会場に、石倉さやか教諭とALTダニエル・エクルストン先生による1学年の授業、松尾篤教諭による2学年の授業が行われた。

1学年では、生徒がALTに紹介したい、自分にとって特別な物を絵カードにして準備した。本時は、そのカードを無作為に引いたALTが持ち主を尋ね、持ち主の生徒とその物についてやり取りを行った。石倉教諭とALTによるモデル対話を聞いた後、生徒はペア、4人グループで、役割を替え複数回練習した。その後の全体活動では、どの生徒も自信をもって取り組んでいた。

2学年では、新任のダニエル先生に日本の生活で使い方に困っている物について説明する英文を作成した。書くことに粘り強く取り組もうとする態度を育成するために、ALTが使い方に困っている物を実物で見せたり、説明する物を生徒に選択させたりした。また、使い方や使う場面等、ALTにとって必要な情報を意識させたことや生徒同士で作成途中の英文を推敲させたことが、生徒の意欲を高めることに効果的だったと思われる。

1学年の部会協議では、やり取りを継続させる指導の工夫等について協議した後、有澤健指導主事（東部教育事務所）から指導助言をいただいた。小中接続の成果を上げるためには、学校段階別一覧表を確認するなどして、小学校の学びを理解すること、その上で「これが中学校の授業だ」と思わせる授業の工夫をしながら中学校の発達段階や特徴を踏まえた学びへと接続することが大切であるとご指導いただいた。

2学年の部会協議では、生徒が考えをシェアリングする際のポイント等について意見交換した。高島雅俊指導主事（西部教育事務所）からは、コミュニケーションをする目的・場面・状況を明確にする必要があること、また、活動前に例を与え過ぎたり、事前に練習させ過ぎたりせず、生徒に考えさせることが思考力・判断力・表現力等の育成につながること等、貴重な助言をいただいた。

今回の大会は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策として、参加者の人数を制限しての開催となった。本大会の成果と課題については、次年度以降に機会を捉えて全英語部員と共有し、生徒の主体的で深い学びの実現に向け、今後も研修を進めていきたい。

志賀 靖子（富・山室中）

【研究主題】 コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか
— 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して —

■高岡地区

高岡市立高岡西部中学校を会場に、子吉佑教諭、井門美樹教諭、ALTナジュ・エリザベス先生による研究授業が行われ、2部会に分かれて協議会を行った。

子吉教諭による2学年の授業では「心が動いた出来事について伝え合う」という課題で、生徒が準備した1枚の写真を基にペアで伝え合う活動が行われた。部会協議では、「課題解決に向けての生徒への手立てが適切であったか」について協議した。生徒が意欲的に英語を使用するためには、導入や場面設定の工夫が必要であるとの意見が出された。

また、高島雅俊指導主事（西部教育事務所）からは、「言語活動の充実に向けての授業改善」「新学習指導要領に伴う評価」の2点について助言をいただいた。特に、授業改善の面では、4技能5領域を関連させた授業をすべきことや単元のゴールを明確にした授業づくりの必要性について教えていただいた。

井門教諭による1学年の授業では「状況に応じてショッピングモールの店内の道順を案内する」という課題で、ペアでの言語活動が行われた。ショッピングモールの案内図と状況・目的等が書かれたカードを生徒全員に配布し、できるだけ即興で会話できるよう工夫されていた。部会協議では、「コミュニケーション能力を養うための授業展開の工夫」「4技能5領域に関連付けた言語活動」について協議した。様々な状況を用意することで、より即興でのやり取りができるという意見が交わされた。

また、横山恵指導主事（西部教育事務所）からは「言語活動における目的・場面・状況設定の重要性」「4技能5領域に関連付けての授業展開の工夫」の2点について助言をいただいた。生徒が実際に英語を使って自分の考えを表現するためにはどんな状況、場面を設定するかが重要であることを学んだ。今後の授業改善をしていく上で貴重な研修となった。

鈴木 智子（射・小杉中）

■砺波地区

砺波地区大会では、南砺市立福野中学校を会場として、橘かおり教諭とALTショーン・ウィリアム・ジョンソン先生による3学年の研究授業が行われた。

「友達の知らない自分を知ってもらうために、最近気に入っている人やものを紹介しよう」という課題の下、どんな内容や表現をどの順序で伝えるかをその場で考え、タブレットでスライドを提示しながら発表する活動が行われた。ペアで互いにアドバイスし合い、繰り返し紹介をしたことで、最初は話す内容が少なかった生徒も、次第に自信をもって豊かな表現内容で紹介できるようになる様子が見られた。終末では、数名の生徒が自分のお気に入りのものを電子黒板で提示し、クラス全体の前で堂々と自分の思いを発表していた。



研究協議では、授業のよかった点や改善点等について付箋を用いてグループ協議を行った。よかった点として、英語を用いて生徒がどんなことができるようになるかという単元の目標が明確であること、また、効果的なICT機器の活用が見られたこと等が挙げられた。改善点として、各活動のねらいを明確にした指示の在り方が挙げられ、今後の授業改善につながる協議となった。

窪田俊介主任指導主事（西部教育事務所）からは、生徒の思考・判断・表現する機会を大切にするために、言語活動を指導する上で、①発表の前に、ヒントや必要な情報を与えすぎない、②教師主導による練習をしすぎない、③便利な英語表現集を配って言語活動を行わないことが大切であると教えていただいた。また、新学習指導要領における評価の在り方についても指導助言をいただき、今後の指導改善に向けて大変有意義な研修会となった。

往蔵 雅人（小・蟹谷中）

各地区の取組から

小矢部市中教研「本年度の取組から」

本年度は新学習指導要領の完全実施に伴い、評価の観点がかこれまでの4観点から3観点へと変更となった。また、その内容や評価の在り方も、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力に応じた内容へと大きく変化した。小矢部市中教研英語部会では8月に夏季研修会を実施し、1学期の指導及び評価について振り返り、情報交換を行った。

研修会では、文部科学省山田誠志教科調査官による研修動画「学習評価と指導について」（英語情報web）を視聴し、新指導要領実施で育成を目指す資質・能力と、その評価の在り方について改めて確認した。また、1学期の定期考査問題を見返し、新学習指導要領の趣旨を踏まえた問題となっていたか、知識・技能及び思考力・判断力・表現力を評価する問題がそれぞれ適切に設定されていたかを参加者全員で検討した。部員からは、「1学期、文部科学省からの資料を参考に試行錯誤してテスト問題を作成したが、自分の中でこれが本当に正しいのかどうか不安だった」「他の先生方と協議したことで、理解が深まった」「出題内容だけでなく、テストで評価するに至るまでの指導も再考の必要ありと感じた」といった意見が聞かれた。

定期テストだけでなくパフォーマンステストも含めて指導と評価の一体化を更に進め、生徒の資質・能力をより一層高められるよう、研究を進めていきたい。

往蔵 雅人（小・蟹谷中）

砺波市中教研「研究授業から」

砺波市中教研英語部会では、研究主題に基づき6月に研究授業を実施した。砺波市立庄西中学校大嶋遼太郎教諭による2学年での授業では、新学習指導要領の「話すこと〔やり取り〕」の項目をねらいとして、教科書の内容を友達にretellする実践を行った。自分で用意したメモやマッピングを基に、イラストを見せながら登場人物の体験や自分の考えを話すことを目標とした。授業ではALTのモデルを聞いた後、グループに分かれて互いにretellし合った。その後、生徒同士で「自分ならこれを加える」という情報をアドバイスし合い、次の活動に生かしていた。

協議会では、付箋を用いてよかった点や改善点等について協議した。キーワードやマッピングが、即興で話す力を育成するのに有効であるという意見や、retellする目的を示すことで更に生徒に必要感が生まれ、意欲的に活動できるのではないかといった意見が出された。

高島雅俊指導主事（西部教育事務所）からは、新学習指導要領における言語活動に関するポイントとして、コミュニケーションを行う目的や場面、状況を明らかにした上で、どんなことを表現するのか（内容面）、どのように表現するのか（言語表現の面）については、生徒自身が考えるように授業を組み立てることが大事であると助言をいただいた。また、参加者からの評価に関する質問に対し、指導と評価の一体化という観点で助言いただいた。

今後も各校での実践を共有しながら研修を進めていきたい。

渡辺 洋一（砺・庄西中）

南砺市中教研「本年度の取組から」

南砺市英語部会では、研究主題の下、確かな学びを育むため、1人1台端末等のICT機器を効果的に使用した授業実践の工夫について研究を進めている。音声入力機能を用いて英文を書く、自分の立場を決め、端末から各自の意見をを入力する、生徒用端末でデジタル教科書を用いて各自音読練習をする、授業の終末にretellingを各自で撮影し、教師機に提出させ評価に生かすなど、各校で実践を行った。

6月には南砺市立城端中学校を会場に、須加野由貴教諭による3学年の授業が提案された。「外国の人に富山を好きになってもらえるような道案内をしよう」という学習課題を設定し、海外からの旅行者と地元の人という役割で、目的地までの行き方を尋ねたり、教えたりする活動を行う授業であった。ICT端末上の富山県の観光地図（路線図、観光&グルメ情報掲載）を用いることで、実際の場面を想定しやすく、生徒はペアで協力しながら、意欲的に活動を行っていた。旅行者役の生徒の問いに対し、案内役は利用すべき路線に加え、その周辺の見所について伝えることができた。授業の終末では目的地等を変えて即興で対話活動を行った。また、振り返りでも端末を用いて自己評価させるなど、ICT機器が効果的に活用されていた。授業後の協議会では、JTEとALTの役割分担の工夫について意見が出された。

窪田俊介主任指導主事（西部教育事務所）からは、自分の考えや気持ちを表現する必要があるなど、コミュニケーションの目的や場面、状況を設定した言語活動を行うこと、即興的な対話を育む指導をする必要があること、学習指導要領や3観点での学習評価等についての貴重な助言をいただいた。今後の指導改善に向けて学びの深い研修となった。

武村 美幸（南・利賀中）